資料５

標津町のノリウツギ原料生産事業の取組

町内にたくさん自生しているノリウツギ

1　ノリウツギとその利用

○和紙抄紙に不可欠なネリの伝統的な原料

・アジサイ科の落葉低木で、全国に分布。夏に白いかわいらしい花をつける。北海道では「サビタ」と呼ばれる。

・美術工芸品（文化財）修理関係では、宇陀紙や補修紙製作（ともに選定保存技術）に不可欠。

・江戸時代には各地で抄紙に用いられてことが文献により知られる。

・近代に入り、北海道産のものが多く用いられるが、今日、需要の低下により、採取者は極めて少なく、採取技術の継承が課題。

○夏期に樹皮を剥ぎ、外皮を削り、内皮を採る

・日当たりの良い場所に成育するが、採取可能な場所にある資源量は限られる。

○内皮を叩いて、抽出される粘液を利用する。

・トトロアオイの粘液とは性質に差がある。

ノリウツギ
標津町・令和2年7月

ノリウツギの花
標津町・令和2年7月

ノリウツギの樹皮を剥ぐ
標津町・令和2年7月

ノリウツギの内皮

ノリウツギの粘液を絞る

宇陀紙（奈良県・吉野町）
掛軸の総裏紙に用いられる

2　北海道が直面している産地を継続する難しさ

項目	課題
①短い採取期間 ・採取時期は7月から8月	専業にはならない仕事量 季節的な労働力の確保が困難
②自然からの収奪型の採取 ・収穫は天然資源に依存 ・獣害による急速な資源量の低下が顕在化	資源の枯渇
③収奪型から栽培型への転換 ・和紙用途での栽培の歴史が無い	栽培技術は未開発
④小さな市場規模 ・必要量は約500kg/年	収入源として魅力が低い

個人や民間企業だけでは課題の解決へ踏み出せない

世代間の技術の継承に着手

苗木作りは栽培化への挑戦

3　標津町役場が産地形成に取り組む理由

- 町内に自生しているノリウツギに和紙材料としての価値を認識
- 文化財の保護に関わる仕事として町民が理解
- 明治時代以来 北海道が産地として果たしてきた役割に共感
- 文化庁・和紙職人・有識者・林業試験場との連携を構築
- 町内の種苗業者が苗木の生産に着手
- 栽培化は町内の遊休農地の活用策

役場としては産業としてだけではなく、
文化・環境・教育といった面も視野に入れ、
ノリウツギで地域の活性化に期待

ニュース > 北海道

北海道　文化・芸能　美術・アート　釧路根室　シェア　ツイート　記事をスクラップ

標津町、ノリウツギを試験栽培　文化財修復の原料、関係者から期待の声

08/04 15:45

標津町の古瀬山林種苗農園でノリウツギの挿し木栽培を視察する文化庁職員や和紙生産者ら

【標津】町は本年度、ノリウツギの採取と試験栽培を始めた。ノリウツギは書画や掛け軸といった重要文化財の修復に使う和紙の原料で、栽培は全国でも極めて珍しい。文化財関係者からは原料の確保に期待する声が上がっている。

ノリウツギは、全国に自生するユキノシタ科アジサイ属の落葉低木で、高さは2～3メートル。樹皮の下にある白い「内皮」が、手すき和紙作りに必要な「のり料」となる。特に、奈良県吉野町で作られている伝統和紙「宇陀紙（うだがみ）」には欠かせない素材だ。

出典：北海道新聞電子版（2021年8月9日）

HTTPS://WWW.HOKKAIDO-NP.CO.JP/ARTICLE/574827

４　今後の課題

項目	内容
①目指すのは「三方良し」のシステムの構築	社会的意義（文化財の保護）と和紙製作へ寄与し、産地がその当然の報酬を得る仕組みづくり
②関係者間で共通の理念を構築	文化財保護の意義や和紙への造詣などを共有
③ノリウツギの管理と収穫を「スキマ業務化」	ノリウツギに関わる作業を森林組合の季節的な「スキマ業務」とすることで、需給と供給のバランスへ柔軟に対応する人材の確保を実現
④事業の継続に向けた取り組み	・原料産地と和紙産地との交流 ・和紙職人の満足度を高める品質の確保 ・生産性を高める収穫技術と栽培技術の開発 ・需要の喚起と中長期的安定性の確保

事業の持続的な継続には公的支援も不可欠